

尾州有楽流 教本

【中級編】

茶会・茶事での服装と着物の種類

① 和装の種類と格式

着物の生地には「正絹（特に羽二重や縮緬など）」「紬（つむぎ）」「麻」「綿（めん）」などがあります。

昭和期までは羊毛（ウール）の着物もありましたが、格の低いものですので茶道では用いませんし、今は流通もほとんどしていません。

現在はむしろ化繊（化学繊維）の着物が増えました。化繊は洗えるので、正絹などに見えるようなものなら着ても構いませんが（もちろん茶席の格によりますが）、化繊そろろうの着物を着るのは恥ずかしいのでやめましょう。

茶席用の着物として用いられるのは「正絹（特に羽二重や縮緬など）」です。蚕の繭から採った糸で平織で織られた布です。

「紬（つむぎ）」も蚕の繭から採った糸で織りますが、屑繭を紡いだ糸で織るので、羽二重や縮緬といった正絹に比べてグッと格が低くなります。

麻の着物は夏に単衣（ひとえ・④参照）仕立てにして着ます。麻布のなかでも上布（じょうふ）とよばれる最高級のもは、正絹に匹敵する格があります。

綿の着物は要は浴衣なのですが、どんなに上等な綿布でも、正絹に匹敵する格はないので、茶席に着る着物としては不適當です。

② 男性の着物

男性の和装は、長着（いわゆる「着物」といつているあれ）の下に長襦袢（最近は簡易な「半襦袢」がよく使われます）を着て、その下に肌襦袢など肌着を着ます。丸首の肌着を着ていて着物の襟合せから肌着が見えていると本当にみっともないので、注意してください。

襦袢の襟は、長着が通常の色無地ならば紺などの色の付いたものにし、黒紋付の場合は白の襟にします。

長着を着たら、帯を締めます。千家系の茶人は袴を履かないので帯が目立つこともあり、金襴・緞子などの非常に高価な帯を締めているのを見ますが、尾州有楽流の場合は武家の服装に准じますので、正絹の博多献上帯が最適です。非常にしっかりと織り込んであるので、刀を差すのに丁度良いので、武士は専らこの博多献上帯を愛用していました。なお、綿の博多献上帯もよく売っていますが、綿はダメです。

帯は、袴を履く場合は一文字結びにすると良いでしょう。（一文字結び→ググってください）

袴を履かない場合は、貝の口結びにするのが一般的です。（貝の口結び→ググってください）

い)

なお、昭和の頃に「大島紬」とよばれる男性用の着物が流行りました（もちろん女性用の大島紬もあります）。大島紬は「紬」と名前が付いてはいるものの、実際には紬というより緋（かすり）織の着物、つまり先染めした糸で織った着物なのですが、紬といい緋といい、着物としては格が低いので、お稽古ならばともかく、基本的に正式なお茶席では着ません。

ちなみに、体格の良い人でなければ、お腹～腰のあたりに晒（さらし）やタオルを巻いて、恰幅を良くさせないとみっともないです。そうしないと帯もキリッと締まらず、うまく着付けができません。

③ 女性の着物

女性の和装も基本的には男性と同じです。肌着を着て、襦袢を着て、その上に長着（いわゆる「着物」といっているあれ）を着て、帯を締めます。ただ、女性は男性以上に体形の補正をしっかりして、襦袢もきちんと着ないと上手く着れません。

そしてまた、現在では長着を「お端折り（おはしより）にする」のが特徴で、このお端折りをキレイにするのがとても難しいです。頑張りましょう。ちなみに尾州有楽流では正式にはお端折りをせず、裾を引きずった「お引きずり」にします。もともと今ではお端折りをする前提で長着が仕立てられているので、お引きずり用の長着でおこないます。

さて、この長着には、小紋（こもん）・色無地（いろむじ）・付け下げ・訪問着（ほうもんぎ）・留袖（とめそで）といった種別があります（いずれも羽二重・縮緬系の正絹です）。

***小紋**：同じパターン柄（がら）・模様が着物全体に施されているもの。柄が大きいほど格が下がり、小さい（細かい）ほど格が上がる。「鮫小紋」といったような、柄が極めて細かい小紋は、色無地と同じ格式となる。

***色無地**：色だけ染めてある無地の着物。

***付け下げ**：絵羽模様になっていない着物のこと。要は、着物の縫い目の箇所でも模様がつかないか、縫い目の箇所にかからないように小さめに模様が描かれている着物のこと。

***訪問着**：絵羽模様になっている着物のこと。要は、着物の縫い目の箇所でも模様がつかないか、縫い目の箇所にかからないように小さめに模様が描かれている着物のこと。絵柄・模様が着物全体に描かれているほど格が下がり、胸や裾のみ描かれているなど余白が大きくなるほど格が上がる。

***留袖**：色留袖（地色が黒以外のもの）と黒留袖（地色が黒色）とがあり、黒留袖のほうが格が高い。上部には模様が描かれておらず、下部にのみ模様が描かれている（「裾模様」という）もの。

※ちなみに、付け下げ・訪問着・留袖などで使用されている「糊防染で絵（模様）を描く（染める）技法」を**友禅（ゆうぜん）**という。

☆男女とも（女性の場合は色無地以上の格のもので）、家紋がある方が格が高くなる。家紋も、背中・首の付け根あたりに一つだけ入れる「一つ紋」、首の付け根と両袖に入れる「三つ紋」、さらに両胸にも入れる「五つ紋」があり、紋が増えるほど格が高くなる。

☆五つ紋が格が高いから良いとかそういう問題ではなく、格が高くなるとそのぶん着て行ける場所が限定されるので（燕尾服を着て行ける場所なんてほとんどないのと同じ）、特に茶道用の着物は、一つ紋・三つ紋程度が丁度良い。また女性の場合、茶道ではあまり派手な、柄々しい着物は好まれないので、色無地に三つ紋や五つ紋を入れて、色無地をフォーマルウェアとして使う人もいる。



左から：小紋、色無地、訪問着、色無地、織り模様のある布（綸子）で仕立てた色無地

④ 季節による取り合わせのセオリー

着物は裏地が付いている袷（あわせ）と、裏地がついていない単衣（ひとえ）とに大別されます。

だいたい10月から5月上旬までは袷の着物を着て、5月下旬から6月と9月が単衣、7月～8月は絹とか紗とかのいわゆる「薄物（うすもの）」を着ます。（薄物も裏地は付けないので単衣の一種でもあります）

ちなみに、「浴衣」は綿布で裏地は付けずに単衣で仕立てた着物です。7～8月の盛夏の時期に着る非常にカジュアルな着物ですので、茶席で着ることは（※本来は）絶対にありません。

⑤ 茶会のお客の場合の服装（基礎編でも掲載）

男性：スーツかジャケット着用。運転手付きの高級車で茶会に行くような身分でない限り、着物は着ないほうが良いでしょう。

懐紙、扇子、使い帛紗を内ポケットに入れておくか、懐紙入れにでも入れて持っていき

ましょう。

女性：スーツやワンピースなど、洋装ならばそれなりの格式のあるもので。着物ならば、カジュアルな茶会ならば小紋や色無地、それなりの茶会ならば色無地か付け下げ。家元での初釜など格調高い会なら訪問着や留袖。

着物の格が高くなるに従い、お化粧もしっかりとすること。

総じて半襟は白。髪は夜会巻などにまとめておくこと。

着物ならば懐紙・使い帛紗を懐中して扇子を帯に指しておきます。そのほかの持ち物は数寄屋袋に入れて持っていることが多いです。洋装ならば、懐紙、使い帛紗、扇子を懐紙入れに入れて、それを更に数寄屋袋に入れて持っていることが多いです。

※男女とも、茶席に鞆類を持込むのは好ましくないので、荷物は最小限に減らして、男性は手ぶらか懐紙入れ程度、女性も手ぶらか数寄屋袋程度のみを持って入席しましょう。

⑥ 茶事（炭手前や懐石料理なども付いた少人数のみを対象にした会）のお客の場合：

男性：スーツかジャケット着用。しかしできれば着物を推奨。現地で着替えが可能ならば、洋服で行って現地で着物に着替えましょう。或いは自宅から着物を着て車で現地に行くのがよいでしょう。間違っても男子が着物で公共交通機関に乗らないように。周りの人から変人認定されます。

着物は、正絹の羽二重地か縮緬地の色無地(カジュアルな茶事なら紬でも可)、無紋か一つ紋くらい(茶事の客で三つ紋や五つ紋は格が高すぎてダサイ、もちろん非常に格の高い茶事なら可)。基本的に袴を履きます。羽織は着ません。

女性：できるだけ着物で。茶事の格により小紋から付け下げ。そのほか茶会に準じます。

⑦ 茶事・茶会の主催者サイドの場合

男女とも着物を着用。

茶事・茶会の格に合わせて、お客よりも一〜二ランク格上の着物にします。

よほどの事情がない限りメガネは外しましょう。

男性は印籠を着用します。特に袴（かみしも）を着用するような式正の会であれば必ず印籠を付けます。